

**このスライドは、モーターボート競走公益資金による
(財)日本船舶振興会(笹川良一会長)の補助金を
受けて制作したものです。**

企画 (財)アジア人口・開発協会(APDA)

『タイトル』

(企画・協賛)

このスライドは、モーターボート競争公益資金による
(財)日本船舶振興会(笹川良一会長)の補助金を受けて
制作したものです。

企画(財)アジア人口・開発協会(APDA)



『帰省ラッシュ』

日本では毎年、正月休みや盆休みになると、

故郷へ里帰りする人々で列車は大混雑する。

これは、大都市に住み多くの人々が、

地方の出身者であることを物語っている。



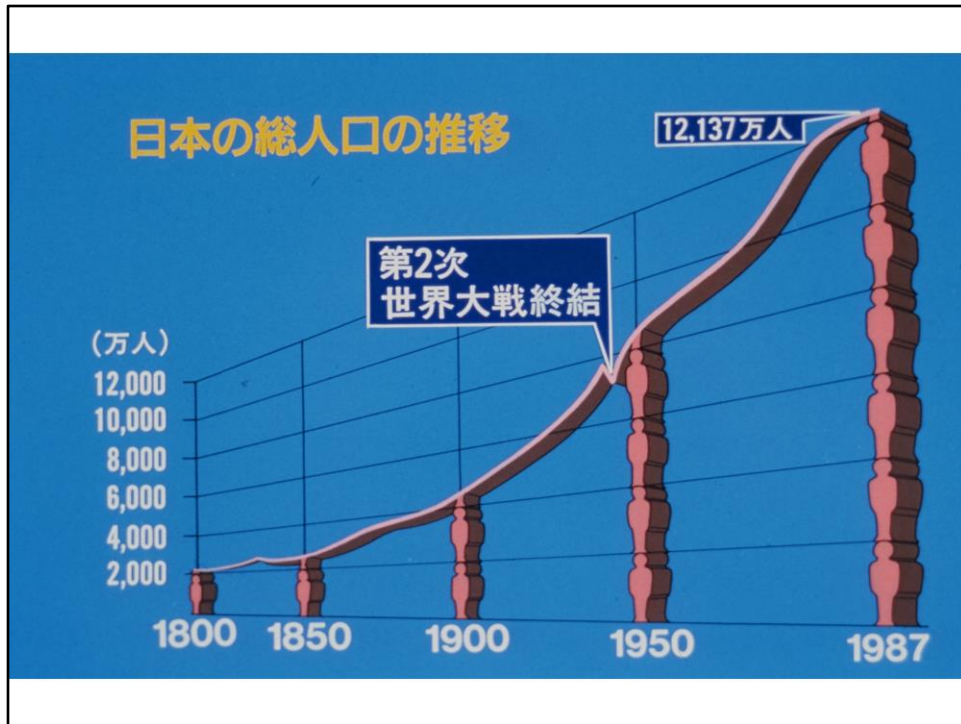
『歩行者天国』

特に1960年代には、年間100万人以上の人々が
地方から大都市へと移住した。

日本の人口移動と 経済発展

『メイン・タイトル』

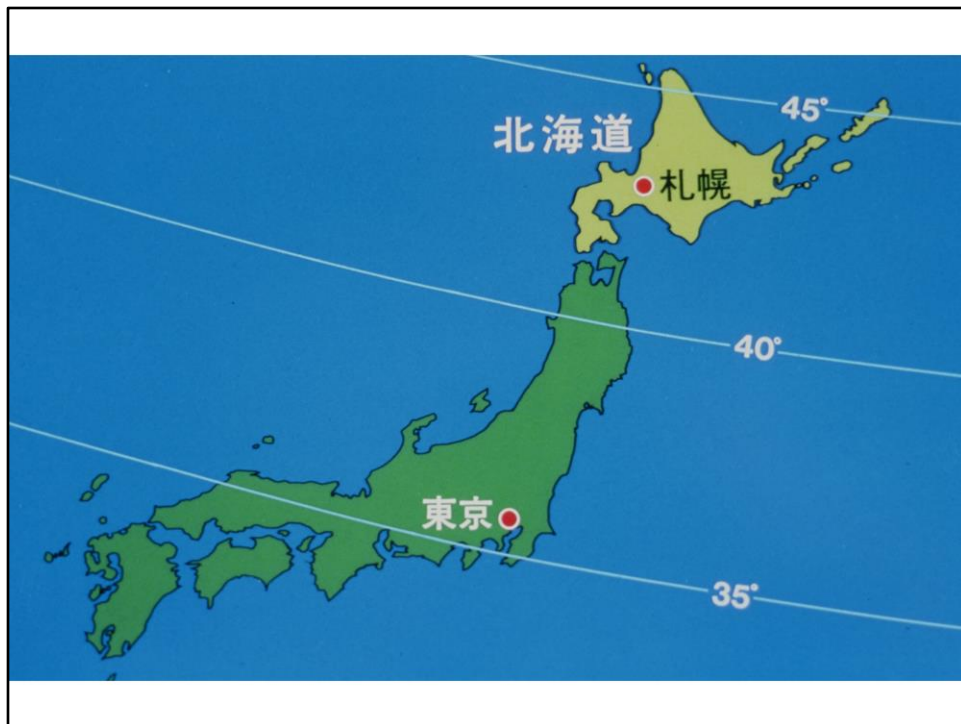
「日本の人口移動と経済発展」



『グラフ(日本の総人口の推移)』

このグラフは、日本の人口増加の様子を示したものである。

1850年以来、人口が急に増え続けている。



『北海道の地図(日本全体図の中で示す)』

北海道。ここは明治2年、1869年に開拓が始まる以前、

日本の主要な四つの島で、唯一未開発地であった。

当時、77,000km²の所に

わずか58,000人しか住んでいなかった。



『開拓初期の農耕風景(白黒)』

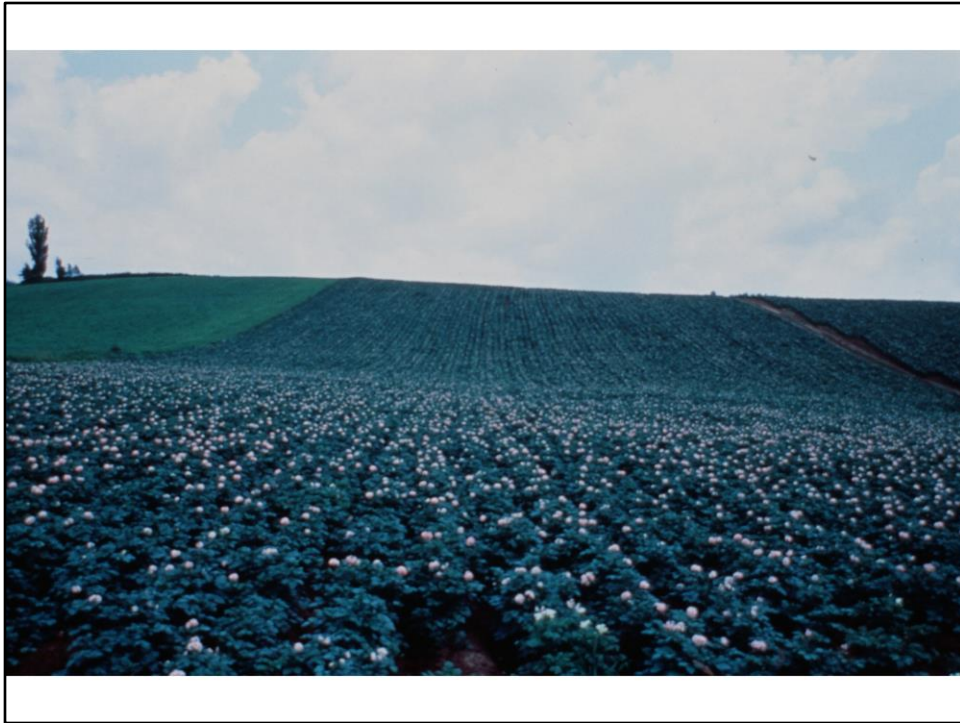
開拓初期の農耕風景である。

北海道へ入植した者の多くは、失業者であった。

近代化に伴う人口増加によって失業という大きな社会問題が発生したが、

第二次世界大戦以前の日本では、

未開地に人を送りこむことによってこの問題を解決しようとした。



『ジャガイモ畑』

現在の北海道のジャガイモ畑である。

アメリカ式の農法を手本にして開発が行われたため、

規模の大きな農業が特色である。

ここでは、人口の移動が経済発展の大きな原動力となった。



『札幌』

札幌は北海道の産業・経済の中心地である。

現在154万人が住む、日本で5番目に大きい都市にまで発展している。



『焦土の東京(白黒)』

第二次世界大戦、敗戦直後の東京である。

当時、都市では仕事はなく、多くの人が農村であてもなく暮らしていた。



『引き揚げ(白黒)』

敗戦により、日本は海外領土を失い、
約600万人もの人々が祖国に引き揚げてきた。
彼らの多くも、まず、農村に生活の場を求めた。



『軍需物資の生産工場(白黒)』

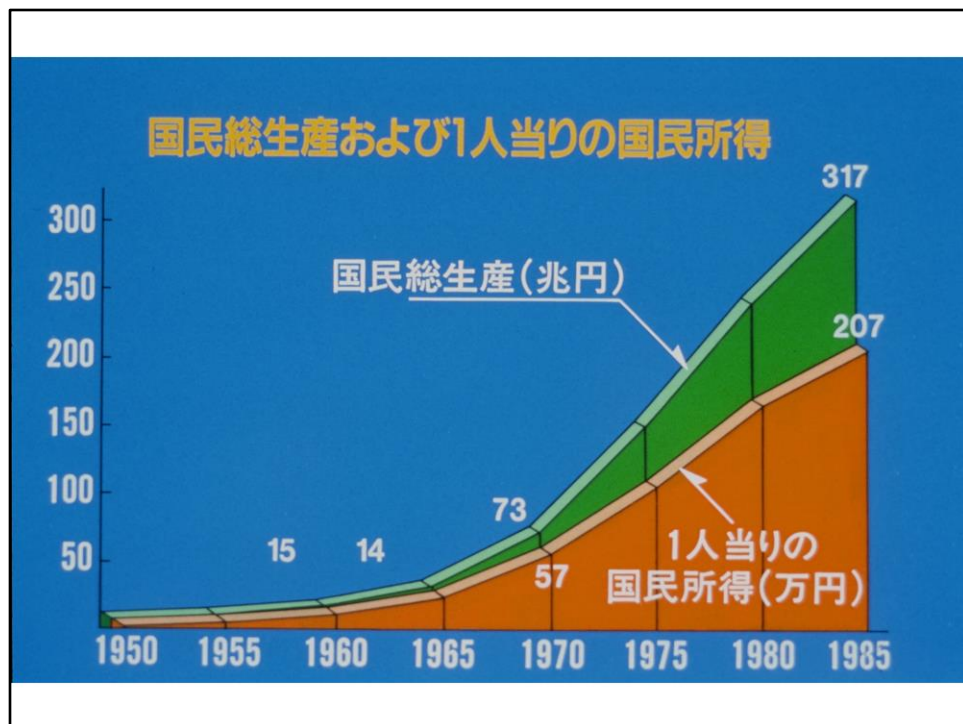
1950年、朝鮮戦争が始まる。

アメリカ軍への軍需用物資調達により、

日本経済は、にわかに活気づいた。

この特需景気をきっかけに、

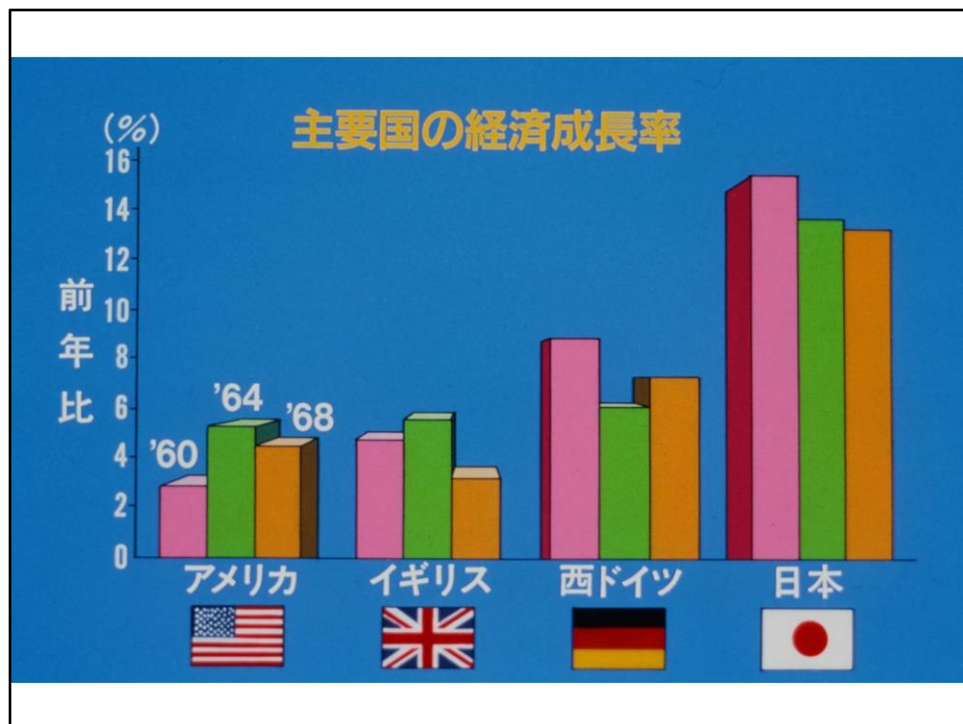
高度経済成長がスタートした。



『グラフ(国民総生産および一人当たりの国民所得)』

このグラフは、戦後の日本の国民総生産と個人所得の伸びを示したものである。

1960年以降の経済成長はめざましいものがある。

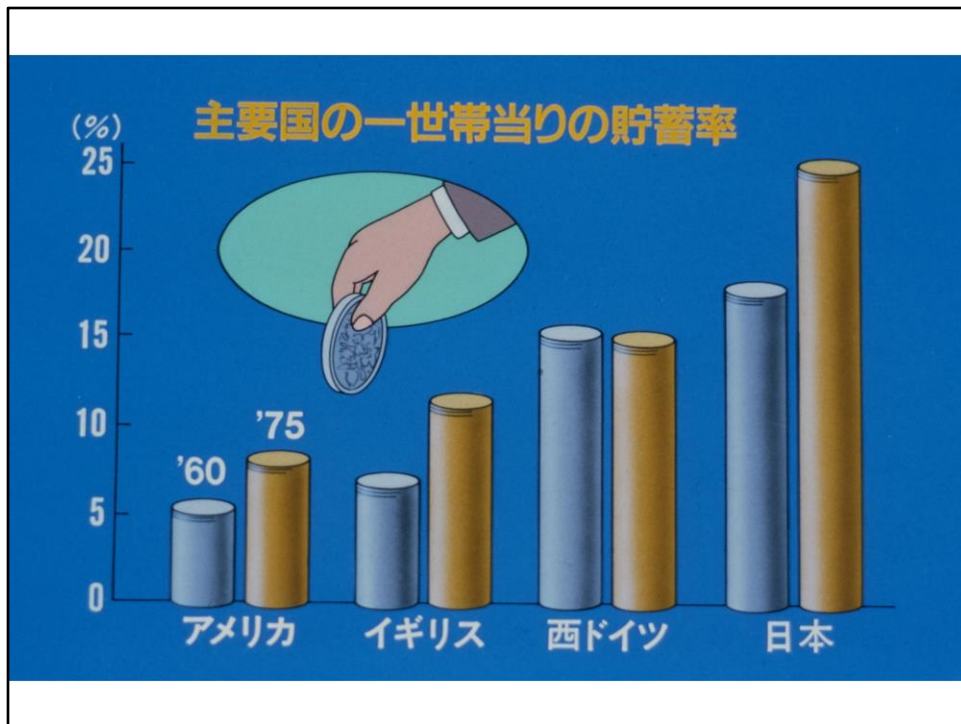


『グラフ(主要国の経済成長率)』

1960年代の日本は、

経済成長率が平均10%で、

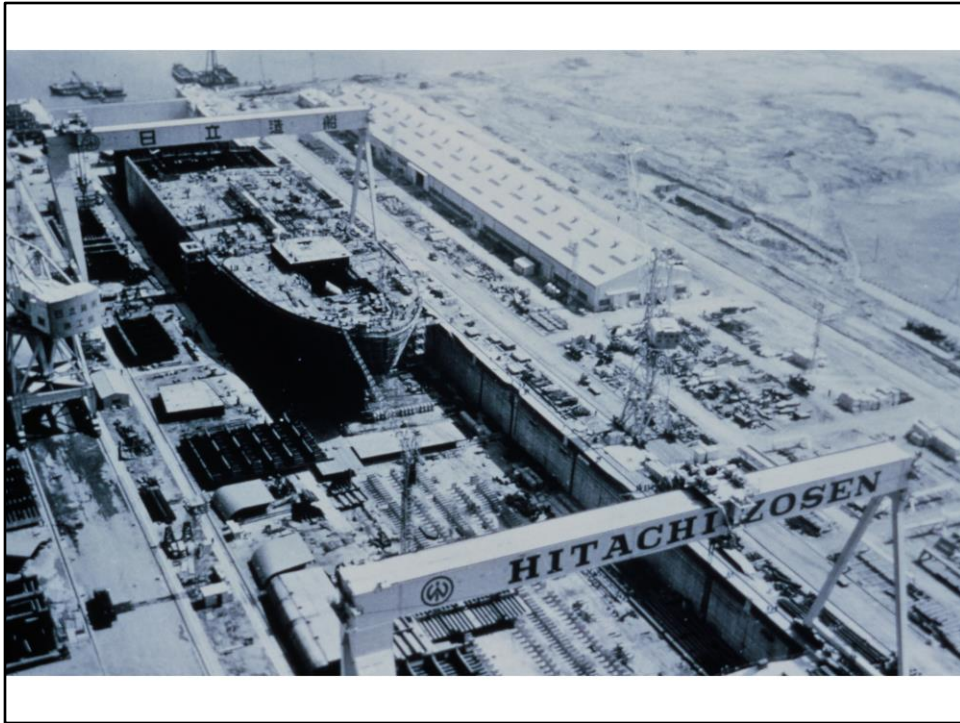
欧米各国の成長率を大きく上回っていた。



『グラフ(主要国の一世帯当りの貯蓄率)』

日本は世界で一番。国民の貯蓄率が高い。

この国民の貯蓄が、工業化のために運用された。



『造船工場(白黒)』

「欧米に追い付け追いこせ」。

このかけごえのもとに、経済復興は急速に進んだ。



『最新設備を備えた製鉄工場(白黒)』

敗戦で破壊された生産施設は、

新しい技術を欧米から導入して次々に建設された。

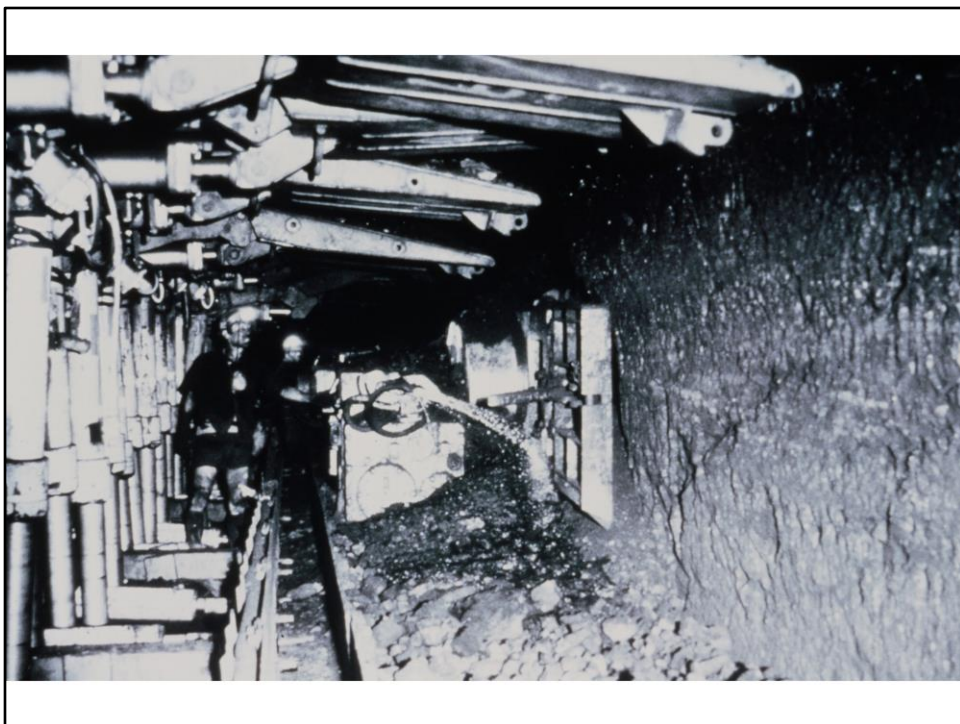


『自動車の組み立てライン(白黒)』

乗用車の大量生産工場。

国産車時代の幕あけである。

後に、日本の自動車工業は世界市場を制覇する。



『鉱山の閉山(白黒)』

そうした経済成長の影で、

石炭産業は斜陽産業となっていた。

そして炭鉱は次々に閉鎖されていった。



『タンカー』

石炭産業の不況の原因は、エネルギーの主力が

石炭から石油へと大きく変わったからである。

資源の少ない日本が、高度経済成長をとげることができたのは、

安い石油を中東を始め、産油国から輸入できたことも、

大きな原因である。



『臨界コンビナート(全景)』

1960年代から行政が主体となって

海岸部に重化学工業のコンビナートの誘致がはじまった。



『地図(日本の工業分布図)』

工業地帯は、輸出入に便利な太平洋沿いに集中、

「太平洋ベルト地帯」を形成していった。

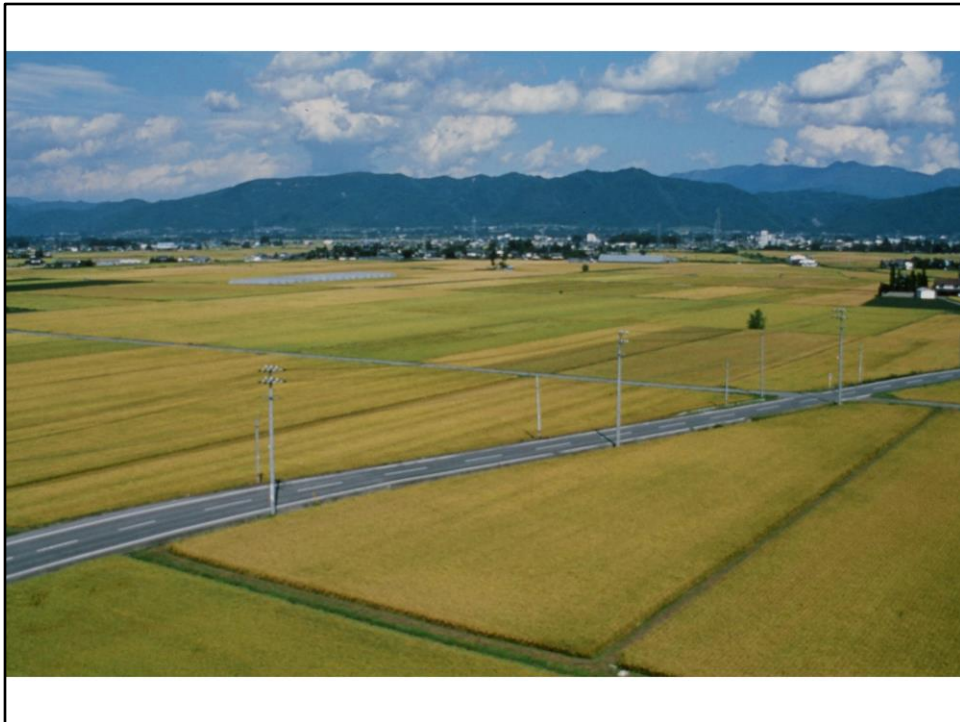


『石油備蓄基地』

国民生活、産業のほとんどを石油に依存する日本では、

オイル・ショック後、各地に石油備蓄基地が建設された。

これによって、常に最低139日分の石油が蓄えられている。



『水田地帯』

日本の農村風景である。

急速な経済成長は、

農村にも大きな変化をもたらした。

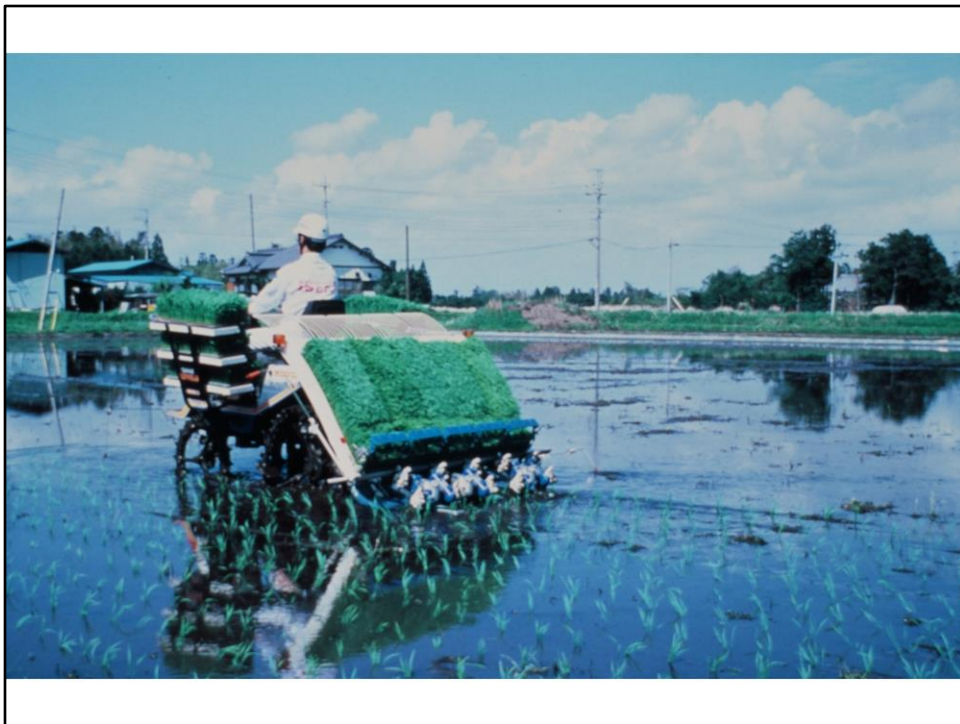


『人力による田植え(白黒)』

日本の農業は、かつて、

「四つんばい農業」といわれるほどの、

人手が必要な重労働であった。



『機械田植え』

1960年以降、機械化が進み、
農民は重労働からようやく解放された。



『水田の農薬散布』

農薬や化学肥料、除草剤の普及によって、
人手のかからない農業が実現した。



『カントリー・エレベーター』

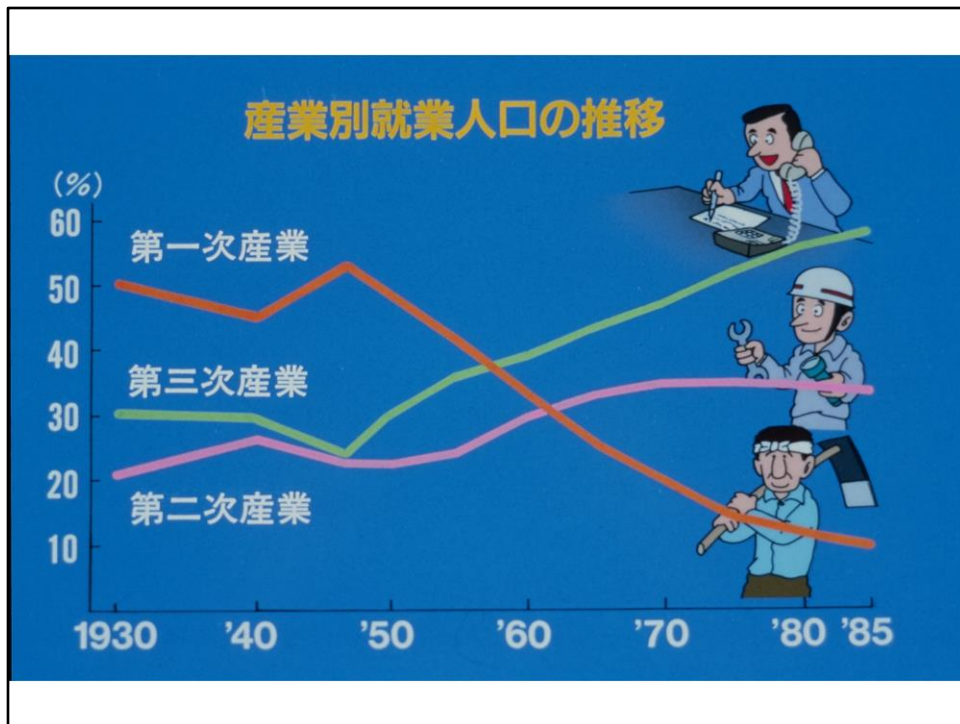
農民は農協を通じて農業機械、農薬、化学肥料を購入した。

米の乾燥、脱穀などはカントリー・エレベーターでの共同作業で処理している。



『カントリー・エレベーター(中)精米』

これは共働で米の精米をしている所である。



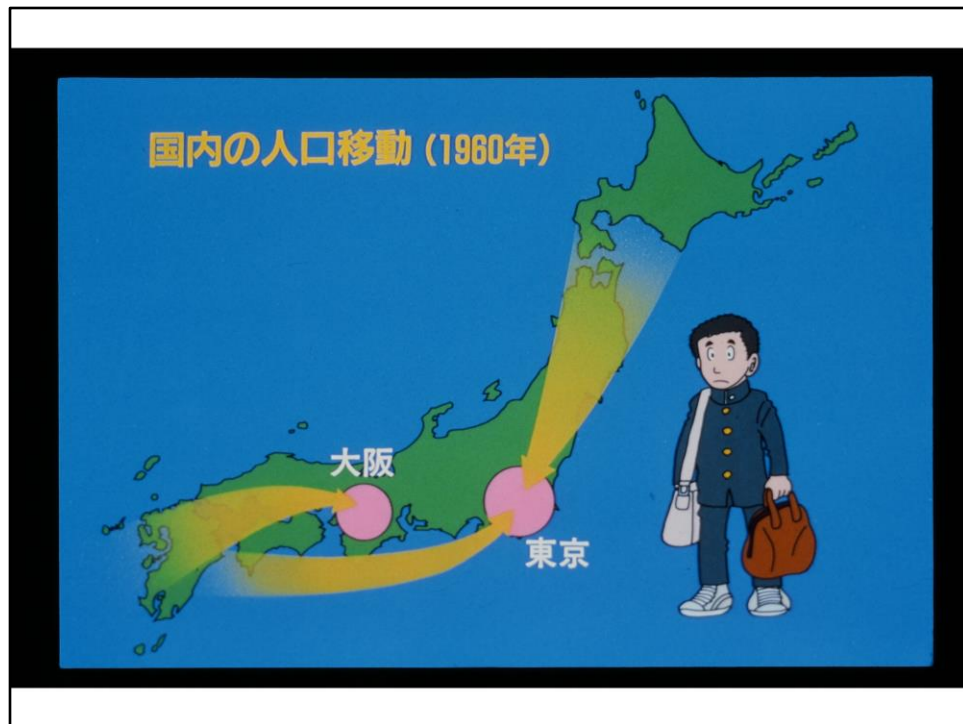
『グラフ(産業別就業人口の推移)』

これは、産業構造の変化を表したグラフである。

1950年を境に農業人口の減少は、著しいものがある。

一方、第二次産業と第三次産業の人口はふえている。

この変化はどうして起こったのだろうか。



『地図(国内の人口移動)』

1960年代は、ほとんどの地方から大都市に向かって

人口が移動した時代であった。

そのために不足する労働力を農村に求めた。



『集団就職列車から降りる中学生たち(白黒)』

集団就職で上京する中学生達・・・。

中学・高校卒業者の多くは、

大都市に出て働くようになった。

地区ごとの商工会や雇い主が、

列車をチャーターしてまで農村から若者達を迎えた。

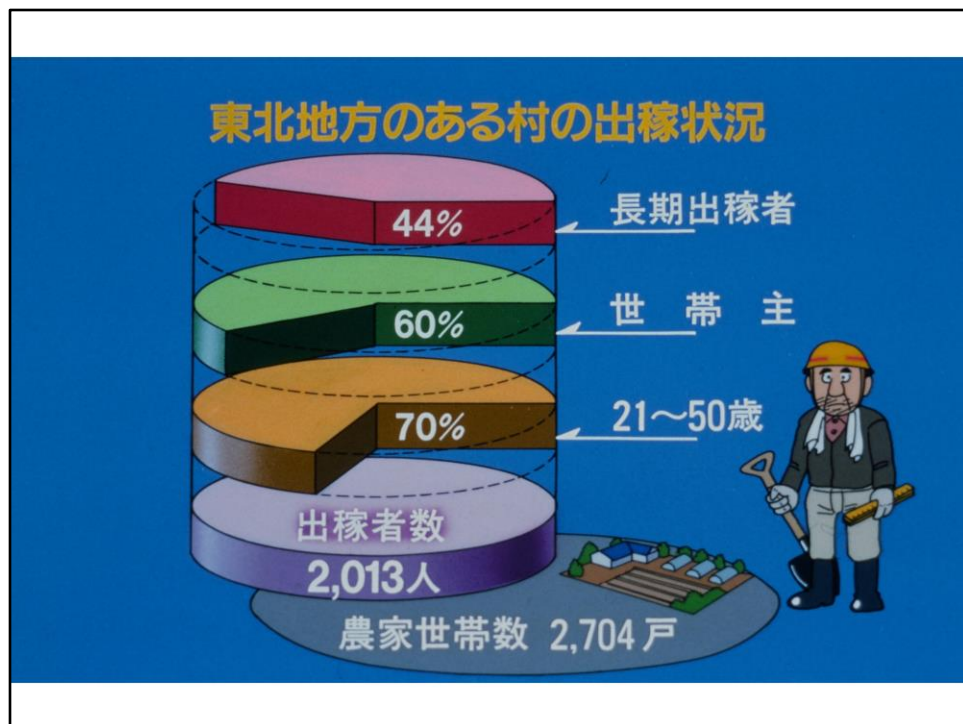


『町工場で働く若者達(白黒)』

こうした若者は「金の卵」と呼ばれた。

彼らは町工場や商店で働き、

日本の経済を根底から支えた。



『グラフ(東北地方のある村の出稼ぎ状況)』

このグラフは、東北地方のある村の出稼ぎの状況を示している。

農家世帯2704戸のうち、2013人が出稼ぎに出ている。

その内、70%が21歳から50歳までの働きざかりの農民であった。



『父を見送る母と子(白黒)』

出稼ぎに行く父親を見送る母と子。

農作業の少ない冬の農村から、男たちの姿が消えていった。

夫が出稼ぎに行った後、妻は心配で眠れない日が続く。



『建設現場で働く人々(白黒)』

建設現場で働く出稼ぎ者たち。

彼らも、家族と離れて、

孤独な日々を、大都市で送っていた。



『アジアから来た花嫁を囲んだセミナー』

現在、農村では後継者不足に悩んでいる。

また、40歳を過ぎても独身の男性が目立つようになった。

都市のサラリーマンより収入が多くても、

農家の嫁になる人が少ない。



『フィリピンの花嫁』

今ではアジアの国々から花嫁を募集する村もある。



『東京』

首都・東京である。



『住宅密集地帯』

日本は国土が狭い上、70%が山に囲まれている。

大都市に産業と文化が集中しているため人口が都市に集まり、
都市の過密化が問題となっている。



『木賃アパート(外景)』

多くの若い夫婦は、一部屋の狭いアパートで暮らしていた。

後に「ウサギ小屋に住む働きバチの日本人」と欧米から冷笑されることになるが、

日本の住宅事情はいまだに大きな改善は見られない。



『団地(外景)』

住宅難を解消するために、1955年に公団住宅が建設されると、

庶民はマイホームを求めて抽選に殺到した。

競争率は100倍にものぼった。

立地条件のよい場所では、1000倍をこえた。

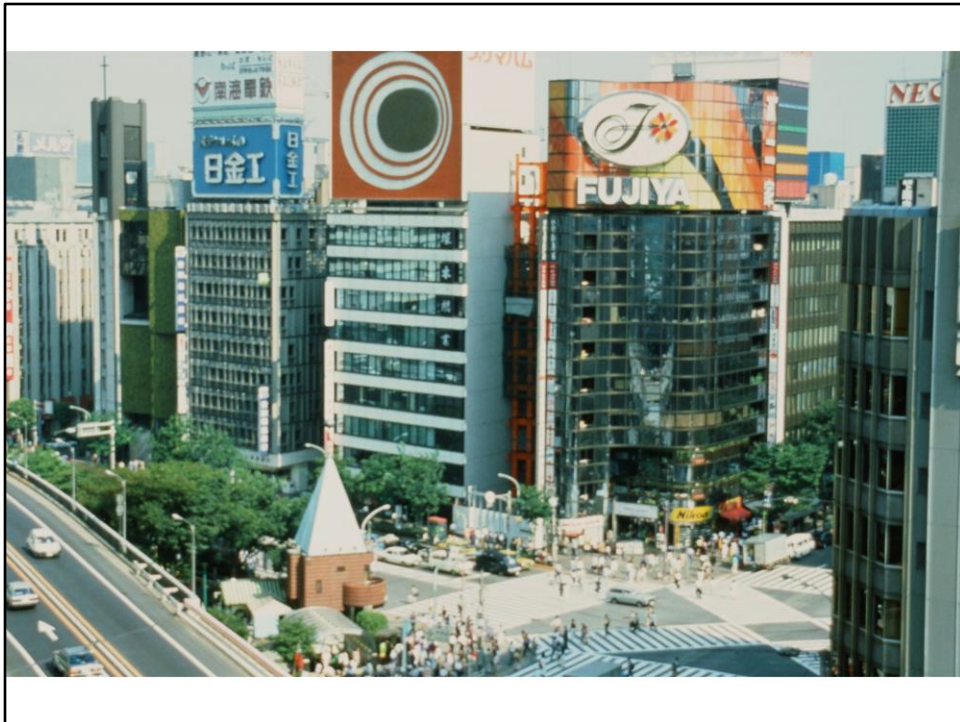


『団地(室内)』

しかし、ここも狭いことにはかわりない。

居間2部屋とダイニングキッチンの2DK、

畳も「団地サイズ」と呼ばれる、標準より小さめのものだった。



『日本一地価が高いビル(銀座4-103-1 塚本素山ビル)』

ここは、現在日本で一番土地の値段が高い所である。



『ハンカチ一枚の土地』

ハンカチ一枚分の土地が、200万円もする。



『農地に混在する近郊住宅』

東京近郊の農村でよくみられる風景である。

1960年から85年にかけて、土地の値段は40倍にも値上がりした。

そのため、住宅地はますます都心から遠ざかっていく。



『郊外の住宅』

家は広くなった。

しかし、住宅ローンの返済は退職まで続くという、

気の遠くなるような話だ。

庶民にとって家を建てることは、

男子の一生の仕事である。

何ともゆううつな現実だ。



『通勤ラッシュ(駅のホーム)』

毎朝の通勤ラッシュ風景である。

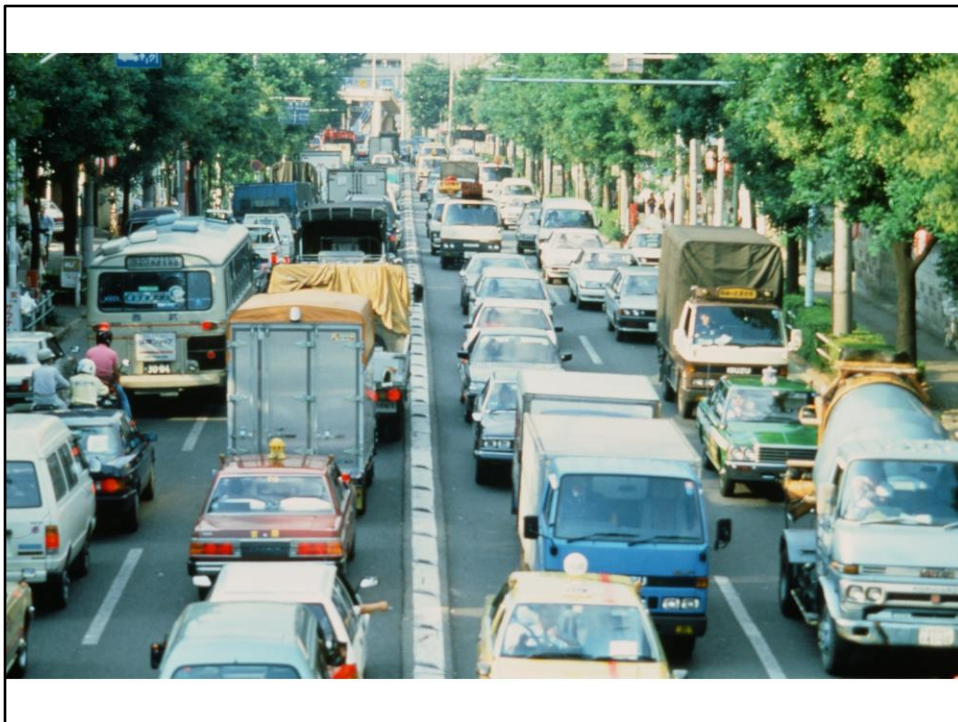
郊外に移り住んだ人は、毎日、

こうした満員電車で2時間も乗って通勤する。

それでも都心部の土地が高いので、

土地の安い郊外に土地付きの家を求めて、

郊外へ郊外へと移り住んでいく。



『交通住宅』

大都市は車の洪水である。

「歩けば5分、車では10分」と言われるような

交通渋滞が日常茶飯事である。



『公害①(白黒)』

経済成長の影に、産業化・都市化の進む場所で、

水俣病、四日市ぜんそくなど、悲惨な公害病が発生した。



『公害②(白黒)』

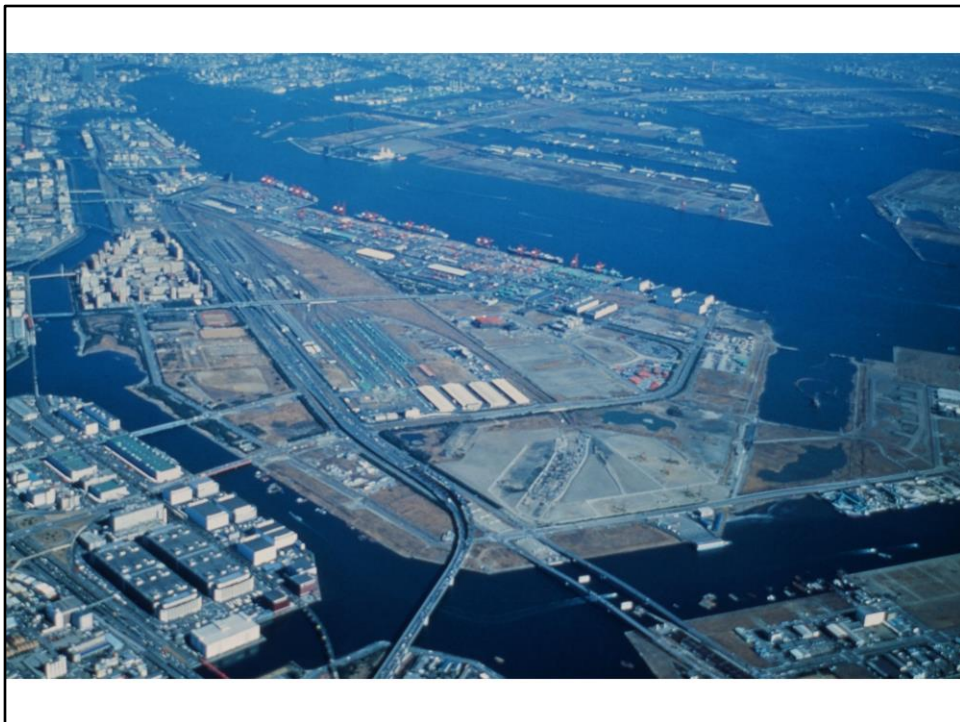
これは、公害の被害者や行政や企業に補償を要求している所である。



『ゴミ戦争(白黒)』

大都市に産業と人口が集中したために、

ゴミの処理には、自治体はどこでも悩まされていた。



『東京湾(空から)』

海岸の埋め立ては、土地不足に悩む大都市にとって、

居住空間を広げることもあった。東京の場合、

埋め立ての歴史は400年前にさかのぼる。

現在までに、東京23区の40%にあたる23,700ヘクタールの土地が

埋め立てによって出現した。

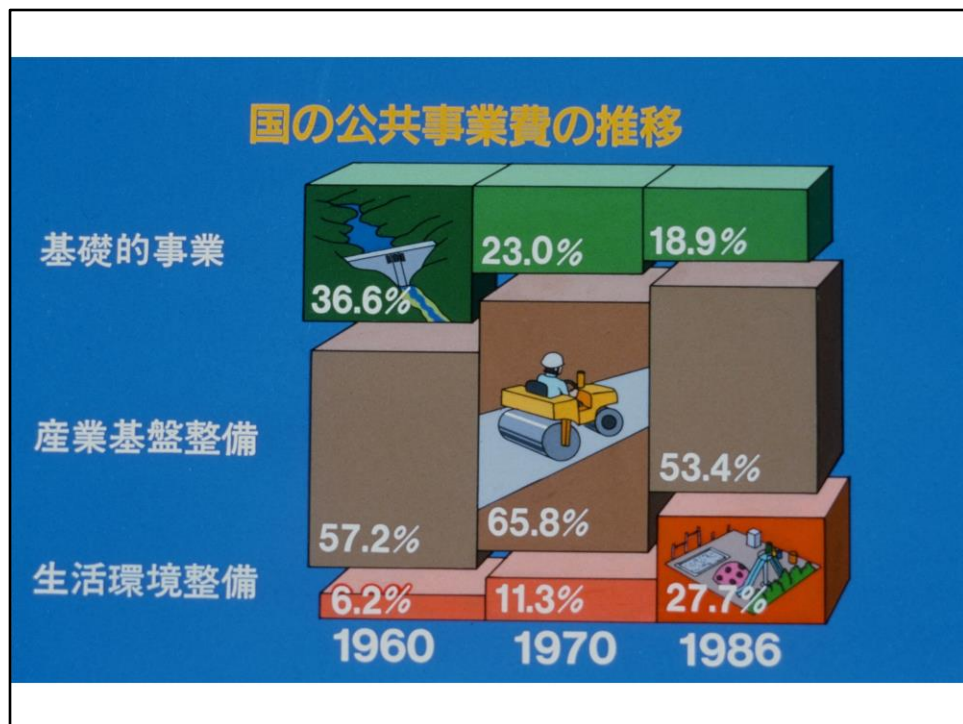


『海上公園』

埋立地に作られた公園。東京の埋立地には、

現在、34か所の海上公園がある。

これは、自然と調和した豊かな生活環境を求める都市住民の願いの現れである。



『グラフ(国の公共事業費の推移)』

このグラフは、国全体の公共事業費の内訳を示したものである。

高度経済成長期には、産業発展ばかりに目がうばわれ、

生活環境の整備は遅れた。

1970年代に入ると、それに対する批判が国民の間で高まり、

徐々に生活環境も整備されていった。



『高層ビル街(新宿)』

これは、東京の新都心、新宿である。

日本は地震国であるため、ビルの高層化はおくれたが、
建築技術が進んで、その障害は克服された。

土地の値段が非常に高いことも、
高層化に拍車をかけている。



『地下鉄』

東京都内を網の目のように走る地下鉄は、

一日900万人以上の人に利用されている。

地下鉄は都市生活にはなくてはならない足である。



『地下鉄』

新宿駅周辺の地下街。

一日、66万人もの人が利用するこの駅では、
地下街が歩道の混雑緩和にも役立っている。



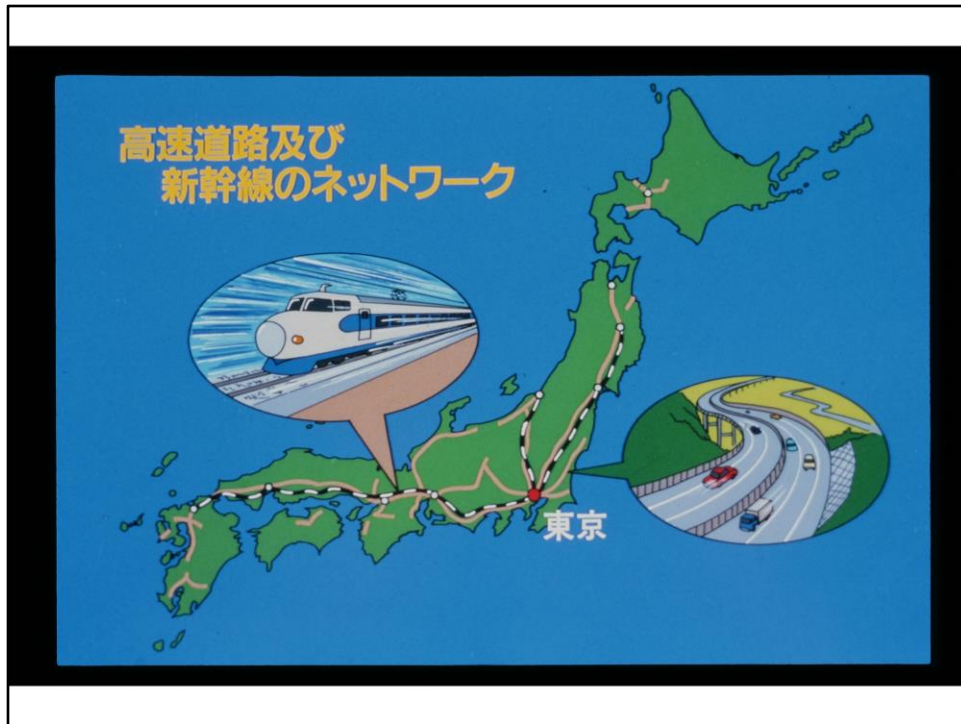
『首都高速道路(地上から見上げて)』

空を走る首都高速道路。



『首都高速道路(俯瞰)』

1964年のオリンピックを契機に、道路の立体化も発達した。



『地図(高速道路及び新幹線のネットワーク)』

この図は、日本の高速道路と新幹線の広がりを示したものである。

全国の主要都市が結ばれている。

1970年代になると、人と産業を地方へ分散させる政策が立てられた。

そのためには、輸送のスピード・アップが必要とされた。



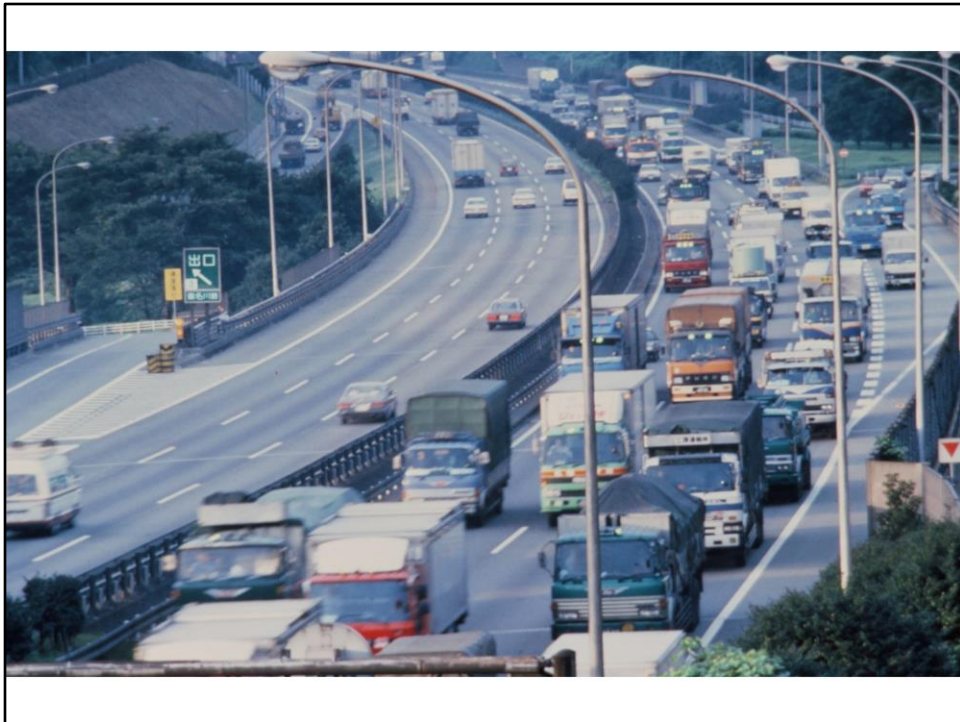
『新幹線(走り)』

新幹線は、エレクトロニクスによる自動制御装置、

継ぎ目のないロングレールなど、最新の技術が応用された。

当時、時速220kmという世界一の速さと開通以来の無事故を誇っている。

東京を中心に500km圏内では、日帰りで出張できる。



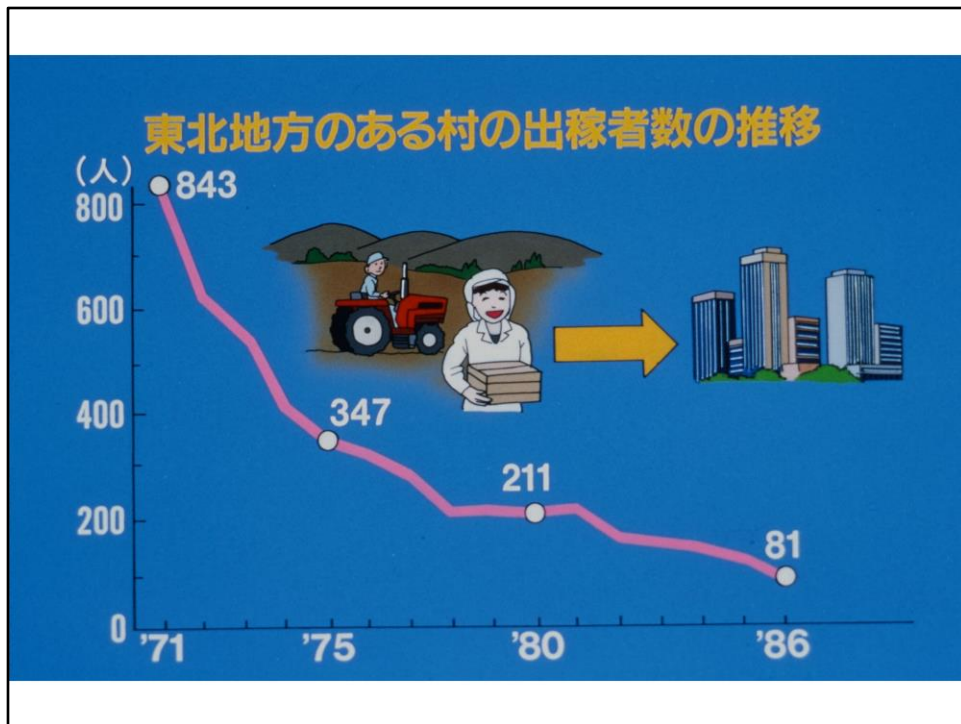
『高速道路を走るトラック』

高速道路網の発達で、
短距離輸送の主役であったトラックは、
長距離輸送の花形になった。



『宅急便』

一方、家庭の荷物が日本中どこからどこへでも、
翌日には届く宅急便が出現した。



『グラフ(東北地方のある村の出稼者数の推移)』

このグラフは、この村の出稼ぎ者数の変化を示したものである。

企業の誘致で、出稼ぎ者の数はだんだん減ってきていることがわかる。



『農村にある工場(外景)』

農村に誘致された工場。

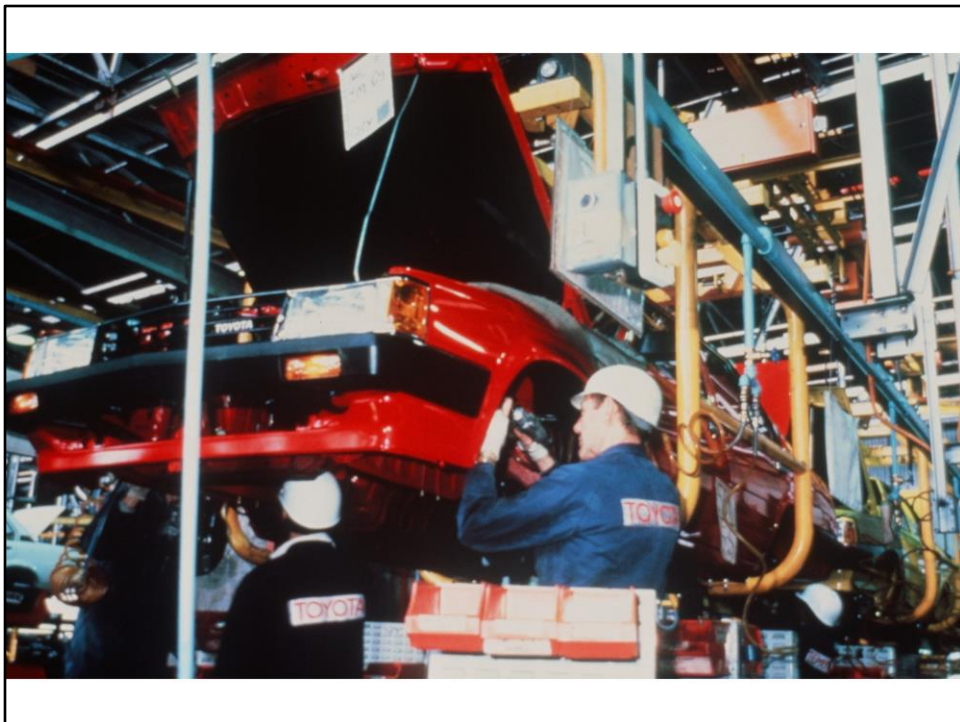
この村では、積極的な企業の誘致運動を行った結果、

現在、14社の工場で、4500人が働いている。



『老人による農作業』

農家の後継者である若い人たちが工場で働き、
その親達が農業を続ける、という傾向が強まった。
工場進出も、農業の高齢化に拍車をかけた。



『海外の日本企業(工場で働く外国人)』

しかし、円高不況・貿易摩擦によって、今、

こうした企業進出に大きな陰りが出てきた。

地方進出をストップし、海外へ工場進出する企業が増えている。

これを産業の空洞化と呼んでいる。

それに伴い、日本国内では、失業者が増えていく。

これを産業の空洞化と呼んでいる。



『表彰される老人たち』

これは敬老の日に表彰される老人たちである。

現在の日本は、失業者の増加にくわえ、

老人が増えていく高齢化社会を迎えている。



『工場予定地(がらんとした空間)』

この空地は、工場用に造成された土地であるが、

いつまでたっても空地のまま残されている。

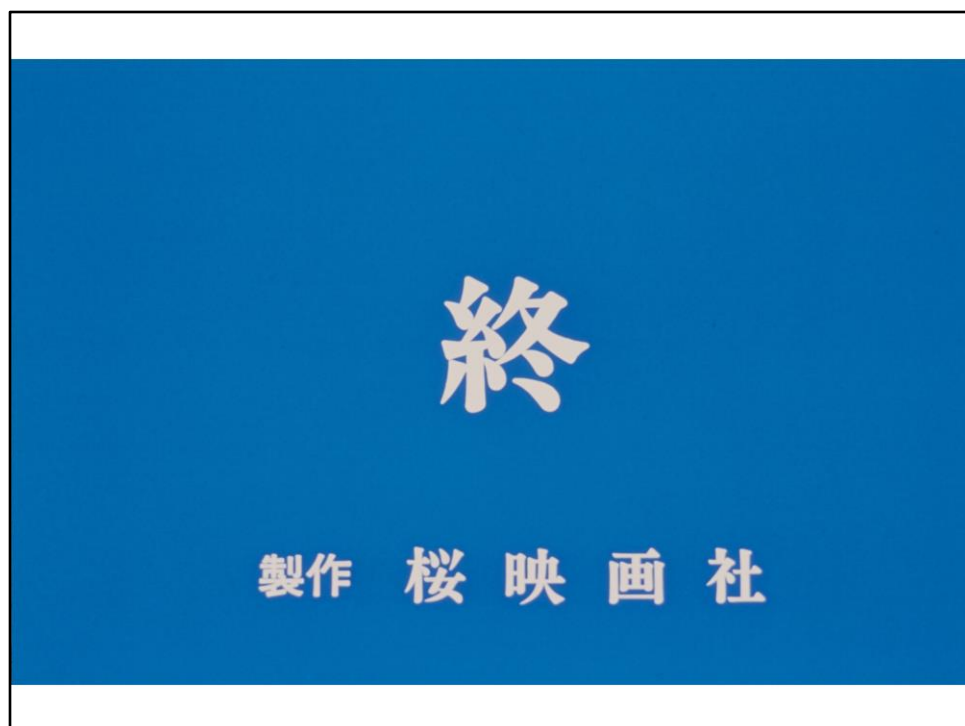
現在、こうした場所が各地で見られるようになった。

日本が直面している厳しい現実が、

こうした風景にも顔をのぞかせている。

日本は解決しなければならない難問を、

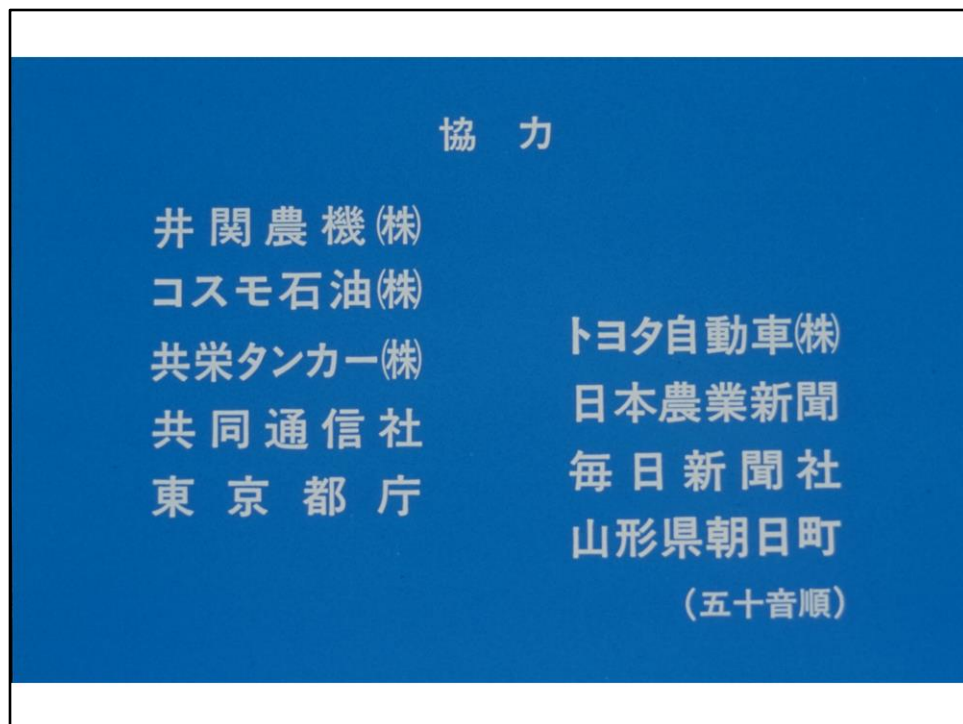
まだまだ沢山かかえている。



『タイトル』

(終・製作)

桜映画社



『タイトル』

(協力)

井関農機(株)
コスモ石油(株)
共栄タンカー(株)
共同通信社
東京都庁
トヨタ自動車(株)
日本農業新聞
毎日新聞社
山形県朝日町

(五十音順)